88130113

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A: LITERATURE – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A : LITTÉRATURE – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A: LITERATURA – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Friday 8 November 2013 (morning)
Vendredi 8 novembre 2013 (matin)
Viernes 8 de noviembre de 2013 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2013

https://xtremepape.rs/

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

1.

わが家に自慢の出来そうなものは何もない。主人の私の才能は貧しいし、お酒、怠慢、狂躁（きょうそう）、濫費（らんぴ）、軽薄等……私の悪徳の方を数えあげるなら、たちどころに十本の両手の指を折りつくしたって、とてもそれでは足りないだろう。

それかあらぬか、むかし親しかった友人らにしても、この頃では、誰一人私のところにやって来ようなどと云うものはなくなった。太宰が死に、安吾さんが死んでからと云うものは、私はまるで姨捨（うばすて）の姨みたいに、荒涼の山奥に棄てられてしまった感じである。

まるっきり駄目なのである。仕事らしい仕事も出来ぬ。ぜんぜん見とおしというものがない。ヤミクモに書いて、ヤミクモに浪費しているだけで、人間何モノカ……心の眼はチラとも開かず、現代の姨捨は澄み透る月影の片鱗をだに見ない。そう云う私だから、

「子供はなるべく産まない方がいいよ」

とその都度、正直に細君には囁（ささや）いてきた筈（はず）だ。いつ行倒れるか知れやしない。その期（ご）に及んで、累を子孫にまで及ぼしたくはないのである。

「でも、不自然なことはしたくありませんし……」

これがまた、その都度、細君が私に答える言葉なのである。私は黙るよりほかにない。細君を説得出来るほどの根拠も自信も、私の方にはある筈が無いのである。根拠も自信もないからこそ、私にしてみれば、産ませることの方が心細く、なるべくなら煩累（はんるい）を自分の死後にまで残して置きたくないわけだ。

数えれば、私の子供はもう四人。長男の一郎が十一年、次男の次郎が五年四ヶ月、三男の弥太が二年六ヶ月、長女のフミ子が一年三ヶ月、この春熱海で流産した四ヶ月の胎児迄が育って今頃生まれ出していたとするならば、五人の子供の父親ということになったろう。

いつだったか、石川淳さんが、飲みながら、「もうこうなったら、桂君は手当り次第に子供を産ませるに越したことはないや。一ダースも産んで、日本六十余州を攻め取ってみるんだね」

なるほど、そう思い棄ててしまえばいっそいさぎよいほどだ。

雨降り。それが梅雨の頃の前の日でもあってみると、私の家はさながら、家鳴り震動すると云っても、決して云い過ぎでも何でもない。机から飛降りる、障子の桟（さん）をこわす、襖（ふすま）を破る、いやその襖が理由もなしに顛倒（てんとう）する。いやいや、そんななまぬるい常識的な騒ぎではないのである。何ものとも為体（えたい）の知れぬ物体が次々と鳴りはじめ、ぶつかり合い、その間に泣き声が混る、金盥（かなだらい）が落ちる、土足の犬が踏み上がる、碁石が散る、おしっこ、うんこ、いやはやその狂乱怒濤（どとう）の間隙（かんげき）を縫い歩くようにして、例の不自然なことをしたくないと云うわが家の主婦が、いささか子供らの自然の狂躁に足を取られたあんばいのヒステリックな声をあげている。

https://xtremepaper.rs/

まことにこれが、わが過ぎやすい人生の全貌に近い。

それでも梅雨が晴れ上がって、天日がまばゆく照り輝いてくれさえすれば、子供らは次々と地上に滑り降りてくれるから、かりに次郎が金魚鉢の水を甘そうに飲みこんでいようと、弥太が犬の食べ余しを犬皿から手掴みで食べていようと、フミ子が鶏小舎の中で鶏糞にまみれながら這い廻っていようと、彼等のほんとうの泣き声が湧くまでは、その父はホッと一息。そのあたりに珠玉のように輝いている紫露草の美しい紫紺の発色を、思いがけぬ旅情で眺めやっている。が、油断はならぬ。金魚入れの大甕に次郎が逆落しになってもがいていたと云うのである。

「もう二寸水が深かったら……」

とその母がズブ濡れの次郎を引連れながら云っている。かと思うと、口のまわりを糠と粟で糊付けにしたフミ子が、ワアワアと泣きながら女中に抱え上げられてやってくる。

「鶏小舎の鶏の餌を残らず食べていらっしゃるんですよ」

ヤケ糞の父は至極満悦そうな豪傑笑いになって、「日本六十余州を残らず攻め取る子供達だ、そのくらいのことはあるだろう」

その子供らが、ようやく次々と寝鎮まると、さすがの父も、

「もうこのくらいで、子供は要らぬ」

御覧の通り、わが家の自慢は子供である。人並みと云って悪かったら、先ずまあ動物並みの発育は遂げているに相違ない。まさか余生を子供らに頼むつもりは無いのだから、それぞれ、勝手放題に生きてくれれば父は至極満足だ。それには、犬の餌、猫の餌、鶏の餌、金魚鉢の腐り水と……何でも幼少から、喰い馴れ、飲み馴れていてくれる方が、イザと云う時のもち耐えに役立つかも知れぬ。父は自分の生き方だってお先まっ暗の思いである。とても子供らの半生の責任までは負いかねる。そこで安吾の「親が無くても子は育つなんてものじゃありませんや。親が有っても子は育つですよ」の主旨に思いっきり賛同して、親の義務をあらかた天に奉還したい気持なのである。

（檀一雄『火宅の人』一九七五年）

（注）

太宰　太宰治。作家。
安吾　坂口安吾。作家。
姨捨　老人を山奥に捨てること。
煩累　わずらわしくうるさいこと。また、そのもの。
石川淳　作家。
間隙　ひま。すきま。

https://xtremepape.rs/

2.

幻覚

深夜　庭をあるいていると
宙に浮いているような人にゆき逢(あ)った。
どうやら同じ運命の人のように思われたので
救われた気もちで声をかけると
げヘッと乱れた歯をみせて笑った。
夜なかの庭が心細いのは
まだ　現世を甘くみすぎている証拠だと
その人は呟(つぶや)いて去ってしまった。

庭の空と続いた空間に
古い川が流れているらしい。
そこへ幻が飛びこんだかと思うと　凄(すご)い水音が響いてきた。
その人は荒々しく水を泳ぎ始めた。
長い川を遡(さかのぼ)っても疲れぬらしい。
ときどきふり向いては
げヘッと笑って素晴らしい泳ぎをみせる。
此(こ)の世にいたとき不遇で見せられなかった力が
驚くほど強く示される。

（岡田刀水士『谷間』「幻覚」一九五〇年）

https://xtremepaper.rs/